

平成 29 年度 学校自己評価シート (全体用) 開智中学・高等学校 (中高一貫部)

目指す学校像 (ミッション)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 確実な知識学習を基盤におき、国際的視野の中で自ら問題を発見し、調べ、考え、自分の意見として豊かに表現できる高度に充実した探究型学力 (主体的に学ぶことができる力) を育成する。 ・ 多様な人間関係の中で自らを生かしつつも、周囲との関係において常に協力し行動することできる豊かな心を育てる。すなわち、国際的リーダーとしての資質を育成する。 <p>【心豊かな創造型・発信型の国際的リーダーの育成】</p>
本年度の重点目標	1. 探究・発信型の授業実践 2. 探究テーマ・フィールドワークのより充実した取組み 3. 生徒指導のより一層の充実(人権教育の推進・生徒の自主性の育成) 4. 防災教育の推進

年 度 当 初					中間評価	最 終 評 価(3月)		
番号	評価項目	現 状	具体的な方策	評価指標		経過・達成状況等	達成度	次年度の課題と改善策
1	生徒が主体的に学ぶことができる授業への取り組みをより充実させる。生徒の自己実現に向けた支援体制をより強力に組織化する。	探究型・発信型への授業の取組みについては、教師間において授業方法の共有化および研究授業などが形式的になっている。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 探究型の授業実践を教科および科目ごとに系統的にまとめ、学校全体の取組みへと広がりをもたせ、教師間での授業方法の研修を実施することにより、共有化に向けた検討を行う。 ・ 管理職ないしは学園研修担当者による授業参観を実施し、各教師の探究型の授業方法について具体的に指導する。そのうえで各教師の自己評価を実施することにより、教師自身が探究型授業導入の努力目標を具体的に設定し、管理職がその具体的な達成状況を確認する。 ・ アクティブラーニングの実践例などを、外部での研修を受けることにより、授業に対して新たな視点で研究・実践できるように配慮する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 探究型授業の取組みを系統的にまとめ、共有化することができたか。 ・ 教師が授業評価目標を設定し、目標達成を実践的に確認することができたか。 ・ 探究型授業の指導計画は明確化できたか。そのうえで進路実績に反映することはできたか。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師個人として探究型授業に取り組んでいるものの、教務・教科・学年担当などにおいて、その実践を系統的にまとめることが不十分である。 ・ 管理職と学園研修担当者による授業参観および授業担当者との面接も実施することができた。しかし、面接内容を教師自身の授業評価と連動させ、管理職が具体的に達成状況を確認するまでには至っていない。 ・ 大学や関係諸機関などが主催する研修に参加して授業実践に活かす意欲はある。しかし、教科での共有化が実践できていないことから、広がりが見られない。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師個人の授業で実践されている探究型授業の内容を、教科会などをおして教科責任者が実践例としてまとめ、教師全体で共有し、内容について議論できる研修を実践する。 ・ 管理職と学園研修担当者による授業参観については、参観観点を明示して、より研修内容を明確化する。授業担当者との面接においては、その内容を教師個人の授業評価と連動させた指導面接の場を設定する。 ・ 外部施設を利用した研修(off-JT)は、東京都教職員研修センターの視察ができなくなったことから、より有効性を確認したうえで他の機関を検討する。そのうえで学校内における研修(OJT)の企画実践についても、教科責任者がまとめた事例集に基づいた実施を考える。
2	探究テーマ・フィールドワークのより効果的な実践を研修し計画する。	探究テーマの生徒への取り組み方について、より本質的な疑問を見つけ出せない生徒への具体的な指導方法が確立されていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 諮問委員会での議論およびその内容を活かしつつ、第 5 学年次までを見とおした探究テーマの指導方法について指針を作成し、対応する学年に提案し新しい実践を促す。 ・ 生徒に対して、疑問を持つことの大切さをこれまで以上に認識させることを先行し、より明確な探究テーマを設定させる指導を実践する。 ・ 夏季の教員研修などを利用して、疑問を持たせる指導方法について教師間で共有化を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 諮問委員会での議論を活性化させ、より有用な答申を得て各学年の指導に役立てることができたか。 ・ 教員研修での実践例を指導に役立てることができたか。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 諮問委員会においては、部の創設当初からの理念と実践の現状とを組み合わせた議論が進み、実施可能な学年から提案内容を実現することができた。 ・ 実施する側の教師においても、職員会議などで提案される諮問委員会からの議論の内容をより真摯に受け止め、各学年のより具体的な指導方法に活かそうとする動きが出ている。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第 5 学年次の英国フィールドワークの実施内容までを視野に入れた、各学年における探究テーマの指導の位置づけを計画し実施する。とくに、探究テーマの指導において、各学年の義務的達成目標を明確にし、諮問委員会が実態に合わせた答申(提案)を立案できる環境を整える。 ・ 年度当初に探究グループごとに「探究係」を置き、指導内容が正確かつ着実に伝わり、生徒の思考や行動に直接的に反映できるようにする。
3	生徒が互いの人間性を尊重し適切に対応できる人権意識を養う。(生徒の自主性を育成する。)	生徒自身が問題行動を未然に回避する意志力の育成、自らの考えにより学校生活(行事)を創造する姿勢を育む指導や取組みが不十分である。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒に対して「生活アンケート」の質問紙やその内容を工夫し、問題の発生を察知するだけではなく、問題行動を生徒自身が未然に防止する意志力を育てる指導につなげる。 ・ 学校生活のさまざまな場面において、生徒自身が自ら考え、その考えたことを実行できるような学校環境(教師集団体制)づくりを実践する。(学校行事運営のための教師の体制・校内一斉清掃の監督体制と指導方法・通学路のマナー向上など) ・ 道徳の授業や LHR での指導内容を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 哲学対話などの実践をおして、道徳の授業をより生徒の生活に結びつけた指導ができたか。 ・ 学校行事の運営などで、教師の指導方法や役割分担が明確に示され実践できたか。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒に対して実施する「生活アンケート」の内容を精査して指導に生かし、生徒への具体的な指導につなげること、学年会などで生徒についての情報交換を行い、哲学対話などのテーマに反映させ、問題行動を未然に防止する体制が整いつつある。 ・ 教員の集団および個人としての指導力は向上しているものの、生徒会本部役員や生徒会専門委員会との連携が実現できず、計画で終わっている。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の問題行動に対する対応の体制、問題行動を未然に防ぐための体制も整いつつあると言う認識に立ち、家庭との連携を考えつつ、より多面的で正確な情報に基づいて問題行動に向かう組織づくりを行う。 ・ 哲学対話を実践して 7 年が経過し、道徳授業の一分野として定着している。会話をとおして他者の主張にも配慮する姿勢を育てるだけではなく、生徒が学校生活のさまざまな場面において、自己解決できる力の育成をも哲学対話に位置づける。おのうで、問題行動の防止に役立てる方法を試行する。
4	災害時に備え危険回避の行動計画立案・訓練を実施する。	避難行動計画の内容が教師・生徒・保護者に対して徹底できていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学園全体で訓練を実施することにより、教師および生徒が計画の内容を身体化する。 ・ 災害時における学校の対応および保護者との協力体制について、保護者会役員会において協議し素案づくりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 計画内容を教師および生徒間で共有できたか。 ・ 素案づくりを行うことはできたか。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 岩槻キャンパスにおいて計画された避難行動については、教師間で概ね共有することができた。 ・ メール配信などを活用した保護者との協力体制の話合いが進行している。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 岩槻キャンパスにおける避難訓練は今後も続け、避難行動の確認に活かす。 ・ 保護者との協力体制をより充実させるために、役員会などを通じて学校の取り組みを報告するとともに、メール配信の活用についてより具体化する。

達成度 A: 十分達成 (100%) B: おおむね達成 (80%) C: 変化の兆し (50%) D: まだ不十分 (30%) E: 目標、方策の見直し (20%以下)